

石川啄木と『岩手日報』*

一 初期短歌「白羊会詠草」を中心に一

尹在石**

(e-mail: jsyun@hanbat.ac.kr)

目次

- 一、はじめに
 - 二、啄木における『岩手日報』
 - 三、『岩手日報』について
 - 四、詩歌欄「文苑」について
 - 五、『岩手日報』における「白羊会詠草」
 - 六、終りに
-

一、はじめに

石川啄木（以下啄木）は一九〇一年（明治三四）盛岡中学四年の際、『岩手日報』に「白羊会詠草（一）夕の歌」六首を発表した。以後、啄木は『岩手日報』に多くの短歌、評論、随筆などを発表している。啄木は日記に「三四日前から毎日送ってくる岩手日報、今日から全然体裁が変つて、活字も新しく、気持のよい新聞になつた。此新聞と予との関係も随分長い。」（一九〇八年九月十六日）などと書いているように、

『岩手日報』について特別な思いを持っていたようである。先行研究でも『岩手日報』は啄木にとって「文学的ささえ」¹⁾であったと言われている。

ところで、啄木研究史において、啄木のいわゆる生活派短歌やそれに関わる伝記研究などは多くなされてきたが、初期短歌「白羊会詠草」についてはほとんど研究されていない。それは、啄木の初期短歌は「語彙、韻律、語法、句法など『明星』とりわけ与

* 이 논문은 2011년도 한밭대학교 교내학술연구비 지원을 받았음.

**Hanbat大学校教授、日本近現代文学

1)六岡康光(1995)「岩手日報と石川啄木」『館報 石川啄木記念館第九号』、p.25

謝野晶子の模倣」²⁾という否定的評価と深く関わっていると思われる。

本稿では、こういった啄木研究史を踏まえ、啄木の初期作品の持つ意義を『岩手日報』と関連づけて考えて見たい。初期短歌とは「白羊会詠草」を指す。なお、本文で引用している「文苑」の詩歌は活字化されていないので『岩手日報』原紙より拙者が直接活字化したのである。³⁾活字化の際、読み不可能な字と変体仮名は文脈を考慮して拙者が随意に直した。

二、啄木における『岩手日報』

啄木はこまめに日常を日記に残した多くの文学者の一人であるといえるが、『岩手日報』との関わりについて次のような日記を残している。

三四日前から毎日送ってくる岩手日報、今日から全然体裁が変つて、活字も新しく、気持のよい新聞になつた。此新聞と予との関係も随分長い。三十四年頃の、日報社は呉服町の川越といふ酒屋の隣りにあつた。主筆はその時から神川福士政吉氏、その昔報知新聞が初めて懸賞小説を募集した時、村井弦斎が一等で此人が二等だつたといふ。埋れたる人の一人。武骨な、口下手な、肥つた人であつた。最初の関係は怎してつuitか、今は思出せない。その頃予は中学の四年。確かその年だと思ふ。“寸舌語”とかいふ題で、天外らの写実小説についての評論を一段半許り書いてやると、翌日の新聞に二号標題で乗っていた。それは、高山博士の“近世美学”から得た智識の、最初の応用で、そして又最後の応用であつたらしい。一省略一蒲原有明君の“草わかば”（第一詩集）が出た時、二日間に渡つて日報で批評した事がある。（一九〇八年九月十六日）

啄木はかつての記憶をたどりながら『岩手日報』との関係を思い出している。『岩手日報』との「最初の関係は怎してつuitか、今は思出せない」がその頃は「中学の四年」の時で、はじめて『岩手日報』に文学評論「“寸舌語”」と「蒲原有明君の“草わかば”」を批評したものが掲載されたと覚えている。

こういった啄木の日記の内容を『岩手日報』から調べてみたら、実際『岩手日報』にはじめて啄木の作品が掲載されたのは後述する「白羊会詠草」である。一九〇一年（明治三四年）十二月三日から翌年の元旦にかけての掲載である。

2) 今井泰子(1974)「啄木短歌の技法」『石川啄木論』、塙書房、pp.55-74

昆豊(1985)「その前史・模倣からの出発」『警世詩人 石川啄木』、新泉社、pp.83-96

3) 啄木のものは啄木全集に載っている。

また、啄木のいう「“寸舌語”」は一九〇二年（明治三五）三月十一、十四、十八、十九日にかけて掲載されているし、「蒲原有明君の“草わかば”」の批評は「『草わかば』を評す」と題して一九〇二年（明治三五）一月十一、十二日に掲載されていたことが分かる。啄木の記憶の間違いであろう。

啄木は上の日記に次のような内容を書き続けている。

三十五年の初刷には、白羊会同人の詠草を載せた。その正月の八日（？）に子が発起で、多賀の料亭で“文庫”詩友会を開いた時、その広告は福士氏に頼んで無代で三日許り⁴⁾載せて貰った。白羊会の歌は時々出した様だ。一省略一

同じ三十七年の晩秋、子が上京の途次日報社を訪問した時は、内丸の大達の新社屋に移つてゐた。そして、恰もその時、同社で予を入社させることに決めてゐたといふことを主筆と、清岡主幹から話され、ビックリしたつけ。主幹は頗る残念がって、餞別を五円くれた。其十二月と思ふ。清岡（等）氏が上京して僕を日本橋の西洋料理店でオゴツテ、再び盛岡に帰つて入社してくれる様の話だったが、空想家の予は、中央文壇の生活といふことを二なきものと思つて、応じなかつた。一省略一

三十八年の六月頃の初め、盛岡に帰つて見ると、社は県庁裡から大手先へ曲つたところの、モト車屋だつた家にあつた。それはそれは汚い所。予は“閑天地”といふ題で十何日か続いて随筆を書いた。

九月に出した小天地⁵⁾の広告は、三週間も前から毎日三段抜の大きいのを無料で出して貰った。三十九年の初刷には、予の何とかいふのを四段許りに、せつ子の“紫泉遺稿をよみて”が二段許り載つた。その時と思ふ、初めて二円稿料を貰つたつけ。一省略一今年五月、上京の通知を新渡戸仙岳⁶⁾先生にやつた所が、氏が今日報に客員とし

4) 実際、新聞を調べた結果は二日であつた。

5) 一九〇五年（明治三八年）九月五日岩手県盛岡市加賀野町四番戸の小天地社により創刊された文芸雑誌。B5判変型で、本文は五二頁、広告八頁。編集人は石川一、発行人は父の石川一禎。堀合節子と新居をかまえていた啄木は、一家の経済的自立と文壇への抱負を実現するため友人の大信田落花（金次郎）の経済的援助を得て、この雑誌を刊行した。

小説（金田一京助、細越夏村）、評論（網島梁川、正宗白鳥、新渡戸仙岳）、短歌（高野桃村小笠原迷宮、大信田落花）、長詩（小山内薫、平野万里、茅野蕭々）、俳句（内田秋皎、星山月秋）などとともに、啄木の長詩「仏頭光」「落日」「東京」と短歌一八首、妻節子の短歌六首も「こほろぎ」と題して載せられている。

この「小天地」は一号雑誌で終わっているが、藤沢全は「東北の一小都市を舞台にして発行された『小天地』は執筆陣の多彩さと内容の充実さにおいてきわだっており、啄木の文学活動を知る上で重要であるだけでなく、文学史的にみても注目すべき存在価値をもっている。」と評価している。

6) にとべせんかく

一八五八年盛岡生れ。一九四九年没する。教育者、郷土史家。啄木の盛岡高等小学校の時の恩師。一八八七年気仙郡立高等小学校校長に任命される。一八八九年盛岡高等小学校校長に任命される。一九〇〇年盛岡高等女学校校長に任命される。一九〇七年盛岡高等女学校校長依頼免職、これは凶作義捐金を県教育会の

て関係してるさうで、予の手紙をそのまま日報に載せたといつて来た。一省略—

(明治四十一年九月十六日)

ここにはより具体的に啄木と『岩手日報』との関歴が示されている。興味深いのは啄木が『岩手日報』との繋がりを人間関係と結び付けて書き残しているのである。

『岩手日報』の主筆「福士政吉」について「その昔報知新聞が初めて懸賞小説を募集した時、村井弦斎が一等で此人が二等だつたといふ。埋れたる人の一人。武骨な、口下手な、肥つた人であつた。」と回想している。また、「同社で予を入社させることに決めてゐたといふことを主筆と、清岡主幹から話され、ビックリしたつけ。」「上京の通知を新渡戸仙岳先生にやつた所が、氏が今日報に客員として関係してるさうで、予の手紙をそのまま日報に載せたといつて来た。」とあるように、「清岡主幹」「新渡戸仙岳先生」についても触れている。

こういった内容から、啄木と『岩手日報』に纏わる研究は人間関係が主なものになったのではないかと思われる。例えば、岩城之徳は「啄木が中学生の身で『岩手日報』に作品を発表できたのは、当時同紙の主筆であつた福士政吉（神川）が若き日の啄木の才を愛して厚意的に取り扱ってくれたためである。」⁷⁾と指摘している。

川並秀雄も「石川啄木と福士神川—啄木未発表の書簡を中心に—」⁸⁾のなかで、啄木と『岩手日報』とのつながりは従来、新渡戸仙岳の推輓と知られているが、啄木は「明治三十四年十二月から、『岩手日報』に投稿している。」ことから「この時代は」「当時主筆をしていた、福士政吉（号、神川）」の世話によると分析している。

また、浦田敬三も岩城之徳や川並秀雄の論を踏まえながら「啄木と岩手日報との結びつきは地元紙という立場もさることながら、所詮は啄木の文才と人とおしむ先輩たち、福士政吉・清岡等・新渡戸仙岳との出会いにほかならなかつた。」⁹⁾と指摘している。

『岩手日報』は以上の先行論で分かるように「啄木の文才と人とおしむ」啄木の心の後援者であり、彼の文学的才能を発揮できる場でもあつたのである。実際、活字になつた啄木の全作品を調べてみたら、もっとも多く掲載された媒体が『岩手日報』であつた。つまり、啄木において『岩手日報』は「文学的支え」¹⁰⁾であつたと言えるのである。

書記が横領したがその責任をとられたことによる。

以後、『岩手日報』主筆や社長をつとめたことがある。また、県誌編纂委員長、南部藩史編纂委員、史蹟名勝天然記念物調査委員などを歴任した。

郷土史の著述に『岩手に於ける鑄銭』『徳丹城を発見せいと云う川村仁左エ門氏の家筋』『盛岡消防の沿革と南部藩政の消防』『南部むらさきの由来』『盛岡盲暦研究』『南部藩刑罰法』などがある。(岩手日報社編(1966)『岩手人名大鑑』、岩手日報社)

7)岩城之徳(1960)『解題』『石川啄木全集 第四巻』、筑摩書房、p.479

8)川並秀雄(1976)『石川啄木新研究』、冬樹社、p.301

9)岩城之徳編(1981)『石川啄木必携』、学灯社、p.56

10)六岡康光(1995)「岩手日報と石川啄木」『館報 石川啄木記念館第九号』、p.25

三、『岩手日報』について

それでは『岩手日報』はどのような新聞であったのか。『岩手日報』の歴史について触れて見たい。

『岩手日報』は現在岩手県盛岡市内丸の岩手日報社より発行されているが、その創業は古く明治初期までさかのぼる。一八七六年(明治九)七月二一日、盛岡市呉服町に活版業日進社を経営する川越勘兵衛によって創刊された『岩手新聞誌』に始まる。この『岩手新聞誌』は岩手県最初の新聞でもある。11)これは明治天皇の奥羽地方巡幸を機として誕生した「御巡幸特集号ともいうべきもの」12)で官報のような性格を持っていた。

ところが、この『岩手新聞誌』は一号で終刊され、一八七六年年八月三一日には同社から『日進新聞』が発行される。この時期は、たまたま明治新政府が政治批判にわたらぬ限りで新聞を奨励し、それによって国論の統合をはかろうとしていた頃で、『日進新聞』は県の保護奨励により次第に盛んになっていく。

また、その頃求我社から『盛岡新誌』という政論新聞が生まれる。その求我社は自由民権思想の影響下にあつて、政治評論中心の純然たる民権運動の機関紙としての風貌を持っていた。その時の『日進新聞』は、不偏不党をモットーとしていたが、県の公布紙として援助をうけていたので、求我社からは極端に軽蔑され、『盛岡新誌』と紙上での激しい論争は絶えなかった。

明治十年代後半からは経営不振のため経営者が続いて変わり、一八八四年(明治一七)三月、『日進新聞』は一千二百六十九号をもって終刊になり、『岩手新聞』と改名される。この『岩手新聞』は印刷機、活字を新調して紙幅を大きくし、それまでの『日進新聞』とは比較にならぬほど読みやすいものにした。また、内容の充実、報道の敏速性にもかなり力を入れていた。

しかし、一八八六年(明治十九)七月二〇日「明治以前の夢」という記事が告訴され編集人や社主が処罰されるという筆禍事件と一八八四年(明治十七)十一月四日の盛岡大火などによって、一八八六年(明治十九)九月一七日『岩手日日新聞』が発行されるようになる。

この『岩手日日新聞』ははじめ「我地方の為に農事を奨励し商業を勧誘せんとするの熱意を以て爰に此新聞紙発行の事業を企て」13)ようとするのがその発行の主な目標であったが、自由党の大同団結が盛んに行われた結果一八八九年(明治二二)六月よりは政党の機関紙となってしまった。そして、同年九月には条約改正を論じたことにより発行停止に

11)岩城之徳(1987)『啄木全作品解題』、筑摩書房、p.30

12)日本新聞出版協会編(1956)『地方別日本新聞史』、日本新聞出版協会、p.22

13)前掲注12)、p.23

なった。

その頃、『岩手日日新聞』が政党性を濃厚にしたこともあって、県報としての性格が強かった『岩手公報』が一八八九年(明治二二)十一月刊行される。そして、この『岩手公報』はまもなく『岩手日日新聞』を合併する。その合併の事情については明らかではない。

『岩手公報』は一八九七年(明治三〇)三月『盛岡日報』と合同して『岩手日報』となる。『岩手日報』はこのような背景のもとで生まれたのである。当時、盛岡には『岩手日報』の強力な競争紙として『岩手毎日新聞』が発行されていた。¹⁴⁾

四、詩歌欄「文苑」について

『岩手日報』の文芸欄として設けられていたのが詩歌を主にした「文苑」である。「文苑」は一八九三年(明治二六年)上村才六(号売剣)が『岩手公報』に設けた読者の詩歌投稿欄のようである。上村才六は『盛岡日報』の創刊者で、『岩手公報』と合同して『岩手日報』を設立した。¹⁵⁾「文苑」は『岩手公報』より『岩手日報』に受け継がれて、読者の詩歌を掲載したのである。

当時の『岩手日報』を調べてみたら「文苑」はほとんど毎回欠かさずことなく掲載されていたことが分かる。『岩手日報』における「文苑」の繁盛には、上村才六(号売剣)が漢詩人で文学に造詣が深かったことと関係があったと思われる。

また、『岩手日報』の主筆の福士政吉の影響もあったと言われている。福士政吉は一八八九年(明治二十二)盛岡の文学グループの杜陵吟社が結成された時の世話役の一人で漢籍に詳しく人である。¹⁶⁾

以下「文苑」の実例を見よう。次は、一九〇〇年(明治三三年)八月十二日付、一九〇二年(明治三五年)三月十一日付の「文苑」である。

の「文苑」である。

* 一九〇〇年(明治三三年)八月十二日付
文苑

東山薄衣與風会七月分季題(つゝき)
選者弦木直道大人

14)同上

15)同上

16)今井泰子(1974)『石川啄木論』、塙書房、p.57

松陰納涼	
夕風の涼しくそよ松かけは	白石磬江
夏もいぬらん心地こそすれ	
立よれば涼しさ見えて山松	大村実泰
しけみの陰は夏なかりけり	
涼しさの何処はあれと松陰は	高橋京子
わきて夏なき風かよふなり	
一省略一	
時鳥帰山	
村雨のあれしなこりに一声を	泉田隆光
残してかへる山ほとときす	
衣	
麻衣身にまとひなは心をも	楨舎藤子
あな浅ましと人は見るらん	
一省略一	

* 一九〇二年（明治三五年）三月十一日付

文苑

漢詩（一省略一）

野残雪	花坂吉康
野辺に来て雪めつらしく見る迄に	
春は長閑になりけるかな	
もゝ鳥のさへつる野辺に来て見れば	
小まつがかげに残るしらゆき	
深山霞	野沢直知
み山への霞ひとむら色こきは	
賤かましはの煙そふらん	
早春海	
朝浅み海原とほく波あれて	
ゆきゝなやまんなたの舟人	
初春霞	南部居路

読者欄として、いずれの新聞も設けていたようである。例えば、関東地域の有力新聞の『東京朝日新聞』一九〇一年(明治三四)十一月九日付には「華実集」という詩歌欄が第三面に設けられている。

そして、各新聞は大きく歌の投稿を募集したり、懸賞をかけたりしていた。次は『東京朝日新聞』と『読売新聞』の例である。

「春期の和歌俳句を募る、投稿用紙半紙二折、住所氏名雅号明記」

(『東京朝日新聞』明治三十四年一月十三日付)

「社告 第三回大懸賞俳句募集 引続て新趣向の第三回大懸賞俳句募集を為す詳細は十六日の紙上に広告すべし」 (『読売新聞』明治三十四年十二月十二日付)

このような広告は『岩手日報』においても同じであった。『岩手日報』一八九九年(明治三十二)三月四日付第一面には「○詩歌俳句を歓迎す 詩は杉雨楼主之を評し歌は本堂大人の選にかかり俳句は蓬雨宗匠之を批す」とある。こういった事実から当時の詩歌の盛況ぶりをうかがうことが出来る。

また、個人掲載だけではなく、詩歌会ごとに掲載される場合が多かった。当時の中央紙の『東京朝日新聞』と地方紙の『岩手日報』の例を見よう。先ず、『東京朝日新聞』の場合である。

* 明治三十四年十一月十九日

○華実集 (華実吟社)

霧中雁 東京 南部庸子

めつらしと見上る空は霧こめて

声のみ落るわさ田雁かね

鶉 東京 南部明子

波さわく夜風に床やむからし

こころ細江にうつら鳴なり

同 浦和 松井玉身

おみなえし
女郎花はなさく野遊に床しめて

何をうつらの音には鳴らん

鹿 南部喜久子

妻こふるおのかなけきの秋霧に

へたてられてや鹿の鳴らん

—省略—

暮秋

常陸

舟瑞枝

長月のあり明の月になく鹿の
声さへまれになれる秋かな

「華実吟社」は「東京」「浦和」「常陸」「下総」「青梅」と地名があるように、主に関東地方中心の短歌同人会のようなものである。これらの歌は内容から見て旧派系のものであるといえる。また、短歌だけではなく俳句も載せていた。『東京朝日新聞』（一九〇一年十一月一三日）掲載の「華実集」を見ると、「町の灯は見えて淋しき花野哉 下総、仙美」「虫聞かや恋に眠らぬ夜もすがら 青梅、米子」とある。

次は、『岩手日報』の場合である。

* 一九〇一年（明治三四年）二月七日付
「文苑」

—省略—

杜陵吟社（第四回）冬季雑吟

暁も近ふなりけり嫁が君	炎天
巡礼や寄り忘れたる家もあり	冷山
年礼を早くすまして帰る哉	杏子
葉書持て書き送る年賀なり	寒葉
—省略—	
いち先きに下書きしたり筆始	箕人
あや雲の此枝をはなるゝ初日哉	董舟
猿曳をとりまきあるく子供哉	雲軒
銭貰ふ麦の帽子や猿廻し	三柵

「杜陵吟社」は盛岡地域（杜陵は盛岡の別称）の俳句結社で、メンバーは盛岡中学の文学青年たちである。彼らは根岸派系の俳句で「雪月花をもじって」いた。17) 「いち先きに下書きしたり筆始」と詠んだ「箕人」は後述する「白羊会」の主なメンバーの一人の猪川浩のことであり、「あや雲の此枝をはなるゝ初日哉」と詠んだ「董舟」は野村長一のことである。

17) 昆豊(1985) 『警世詩人 石川啄木』、新典社、p.83

以上で分かるように、『岩手日報』の「文苑」は漢詩、俳句、短歌などが掲載された詩歌欄である。掲載作品は主に読者からの投稿によっている。その歌の内容は旧派系が主なものであったが、「杜陵吟社」の歌のように新派系のものも歌われていたことが分かる。後述するが「白羊会」の「白羊会詠草」も浪漫的風潮を受け入れた新派系の歌である。当時の盛岡地域の詩歌の盛況ぶりが窺われる。特に、詩歌を楽しむ同人会（吟社）が流行っていたことが分かる。そして、盛岡の文学的熱情を支えていたのが『岩手日報』の詩歌欄「文苑」であった。このような時代的雰囲気の中で、「白羊会詠草」は生れたのであろう。

五、『岩手日報』における「白羊会詠草」

それでは「白羊会詠草」は「文苑」欄においてひいては『岩手日報』においてどういう意義を持っていたのであろうか。

「白羊会」は同人誌「爾伎多麻^{にぎたま}」を母体にして結成された短歌会で¹⁸⁾、同人は盛岡中学の「五年生の金田一京助、細越省一(夏村)、野村長一(董舟)、四年生石川一(白蕨)¹⁹⁾、岡山儀七(残紅)、三年生では瀬川深(委水楼、藻外)、二年細越毅夫(夜雨、夜の人)、金子定一など」が主なメンバーである。彼らは「それぞれの歌を匿名にして一冊子に纏めて回覧し、時には旧公園の小沼という家の二階に集まって、煎餅^{かじ}を囁りながら短歌の運座を試みるというふう」であった。²⁰⁾

「白羊会詠草」は「白羊会」の同人たちが詠んだ歌で、一九〇一年(明治三四)十二月三日から一九〇二年(明治三五)一月一日にかけて『岩手日報』の詩歌欄「文苑」に七回にわたって連載されている。これらの歌は『岩手日報』の第一面の「文苑」という詩歌欄の内容として掲載されたものである。それを見ると次のとおりである。

- | | |
|-----------|---------------------|
| 白羊会詠草 (一) | 夕の歌 (明治三十四年十二月三日) |
| 白羊会詠草 (二) | 花売の歌 (明治三十四年十二月四日) |
| 白羊会詠草 (三) | 牧笛の歌 (明治三十四年十二月十二日) |
| 白羊会詠草 | 舞姫の歌 (明治三十四年十二月十九日) |
| 白羊会詠草 (七) | 煙の歌 (明治三十四年十二月二十日) |

18)前掲注17) p.91

19)石川一は啄木の本名である。

20)岩城之徳(1955)『石川啄木伝』、東宝書房、p.65

白羊会詠草 追悼の歌（明治三十四年十二月二十八日）

白羊会詠草 新年雑詠（明治三十五年一月一日）

啄木の多くの作品の中で、はじめて活字になったのもこの「白羊会詠草（一） 夕の歌」である。以下、これらの歌の比較や特徴を分かるためサンプル的な意味で「夕の歌」は全文を、紙面の都合で「牧笛の歌」「舞姫の歌」「煙の歌」「追悼の歌」「新年雑詠」は啄木の歌のみを引用する。

○白羊会詠草（一） 夕の歌（明治三十四年十二月三日）

○ 瀬川委水楼

笠を手に夕野を行く旅人の心あるかな萩路を右へ
絃きるゝ小琴いだきて寝乱るゝ京の女あはれ秋の野のくれ
旅に暮れぬ月にやどらむ梅園の梅の花ちる小池のほどり
かいよする枯藻冷たき門川をたが愛笛ぞ流れきぬ夕
さはとはに絵かゝじものと夕方を絵絹なげやる門川の水

○ 小林花郷

神殿の森にゆふべの霧こめて白き鳩居る旅にして見ぬ
夕寒き人と人の別れまを歌筆そむる梅の間の机
夕くれをひとり戸による春の人梅の香慕ふ眉のすゞしき
かつぎぬと思ひの歌のふしかきてとはにはななじ寒き夜の夕

○ 岡山残紅

欄に夕のそらを眺むればなぐさめ四方に星は朧に
今日もまた野道半ばに黄昏れぬめぐき小羊うちもかねつゝ
今すぎし玉藻刈船かげよいづこ暮れゆく磯に追分のふし
なにとなく昔ゆかしき夕なり君よその夜の琴しらべずや
京の鐘遠くさざりになりとよみ四条五条に夕くれてゆく

○ 石川翠江

迷ひくる春の香淡きくれの欄に手の紅は説きますな人
かりそめの人すさびの鑿の香を春したひよる夕の窓かな
海棠に春の雨濃きおばしまや染めむの歌の絹なき夕
秋の川にあしの穂白き夕暗を主なき小舟野末に去りぬ
流れにし山を西への雲の末に思ひこちたき夕そざる髪
夕くれを落葉に人の笛の手はわなゝく指にふし乱れけり

○ 白羊会詠草 (二) 花売の歌²¹⁾ (明治三十四年十二月四日)

○ 石川翠江

しげ笠に紐は濃かりきくれなるのわかしや花を市にうる人
手にかぎす花は紅花うりの面うつくしき朝もやの野路
野の水にそとぬすみ見し水姿若きを人の花に頼ずる
紫を市にうる人秋の今や見ませ汝が道くれなるのもや (年若き桔梗売の娘を見て)

○ 白羊会詠草 (三) 牧笛の歌²²⁾ (明治三十四年十二月十二日)

○ 翠江

白桃に眉は濃かりき春の野に牧笛追ひて西に去りし人
黄朽葉きくちばに説かじ紅くさ笛を深野に人よ春うらどへな

○ 白羊会詠草 舞姫の歌²³⁾ (明治三十四年十二月十九日)

○ 翠江

まひをへて亂れし髪をそとつくる京の子はしきわた殿の月

○ 白羊会詠草 (七) 煙の歌²⁴⁾ (明治三十四年十二月二十日)

○ 翠江

紺青の雲雀たちゆく春のそらに煙かすれて森の香深き

○ 白羊会詠草 追悼の歌²⁵⁾ (明治三十四年十二月二十八日)

友なる島の君の父君いぬるひ病みて逝かせられぬはかりがたなきつゆの命とじはいへさてもあ
じきな世やかゝかゝ

○ 翠江

木蓮の花のひと片ちりて香の煙りのむなじき今や

-
- 21) 「岡山残紅」三首、「小林花郷」三首、「瀬川委水楼」二首、「石川翠江」四首を詠んでいる。
22) 「朱絃」三首、「右近」二首、「花郷」二首、「翠江」二首、「箕人」一首、「残約(残紅のはず)」
一首、「委水楼」一首、「骸子」一首を詠んでいる。
23) 「箕人」三首、「右近」二首、「骸子」一首、「花郷」一首、「残紅」一首、「翠江」一首を詠んでい
る。
24) 「委水楼」三首、「箕人」三首、唯どれもこれも何のことを歌つたのやら解らず「朱絃」二首、「翠江」一
首、「残紅」一首、「花郷」一首を詠んでいる。
25) 「花郷子」三首、「委水楼」三首、「残紅」三首、「朱絃」三首、「翠江」三首を詠んでいる。

紫にけなむうつゝ雲の色つぎりし今の星のさびしき
 たなごにちりしま玉の露の香にうつゝはとかじ黄朽葉の今

○ 白羊会詠草 新年雑詠²⁶⁾ (明治三十五年一月一日)

○ 石川翠江

夜のみぞ屠蘇の香の深ふして微笑はしき舞子の袖や
 箏の音は月に冴えたり桐壺の宵の勅題に歌なき春や
 おこそか^こに取る手わなゝく新春の宵の燭台に梅の花ちる
 春や濃きさゝめきつきし紅梅の窓の紋の音灯うすき
 呉竹の窓の新春鶯の小羽ふるふよ淡雪のそら
 屠蘇の香に思ひ出うれし奈良の宿にうす黛の朝十九の君
 のとかなる梅の小窓に小扇の歌にはゝえむ舞衣の君
 紅梅や羽子^{はね}つく人の額^{ぬか}にちりて悪くゝもあらず練絹^にの裾^{おりぎぬ}

これらの歌は現代語とは離れているので²⁷⁾現代語に訳してみる。たとえば、「夕の歌」の「瀬川委水楼」の「笠を手に夕野を行く旅人の心あるかな萩路を右へ」を現代語に訳してみると「笠を手に持って夕暮れの萩路の野原を歩いて行く旅人、彼は右の萩路を眺めながら何を考えているのであろうか」のような意味になるだろう。また、「石川翠江」の「夕の歌」の「迷ひくる春の香淡ききれの欄に手の紅は説きますな人」を現代語に訳してみると「夕暮れ、淡い春の香りの迷い漂う欄干にもたれ手に持つ紅い花のように熱い恋を告白なさってはなりません」のような意味になるだろう。「瀬川委水楼」と「石川翠江」こと啄木の同じテーマの歌を一首ずつ比較してみたが、内容や語彙、情緒など全体的には似ていると思われる。他の同人の歌もこういった領域を越えてはいないことが分かる。

これらの歌の評価について今井泰子は次のように書いている。

啄木の一年下級であった岡山儀七が後年に白羊会（校内短歌結社）の詠草集を手にした時の驚きとして書いている。「その当時の啄木の歌は才気煥発と云つたやうな訳で、外の同人のとは名前を見なくとも一見区別が出来るやうに思っていたが、見た処ではどれが誰のか一切見当がつかない。（尤もその集には作者の名がしるしてゐなかつた。）唯どれもこれも何のことを歌つたのやら解らず、とにかく三十一字音にだけはなつていと云ふやうな厄介な歌ばかりだつた」。つまり「どれもこれも」が晶子の擬態だったというわけで

26) 「金矢朱紋」七首、「瀬川委水楼」七首、「岡山残紅」八首、「石川翠江」八首を詠んでいる。

27) 実際、『岩手日報』原紙に掲載された時の活字には変体仮名が混用されている。引用した「文苑」の内容は筆者が変体仮名を仮名に直したのである。

る。晶子に依拠して人々が「三十一字音」を並べることに腐心した時代であった²⁸⁾

今井泰子が言うように「白羊会詠草」は「『どれもこれも』が」「晶子に依拠」して「『三十一字音』」を並べていた模倣的習作の段階であったといえる。当時は『明星』調の浪漫的風潮とりわけ与謝野晶子の歌が多くの文学青年に影響を及ぼした時代で、啄木を含めた「白羊会」の同人たちもそういった文学青年の中にいたのである。

こういった流れの中で「翠江」こと啄木の歌も評価されてきたのである。確かに、啄木のこの時期の歌は語彙、韻律、語法、句法など、与謝野晶子の模倣が多く見られる。²⁹⁾たとえば、「夕の歌」の「夕ぐれを落葉に人の笛の手はわななく指にふし乱れけり」の初句の「を」、「海棠に春の雨濃きおばしまや染めむの歌の絹なき夕」の三句切れの切れ字の「や」、「欄」「髪」「君」「紅」などの語彙がそれであろう。

ところで、興味深いのは「白羊会」の同人の中で啄木がもっとも与謝野晶子の模倣に優れているということである。「夕の歌」の下線を引いたところを見ると啄木の歌と他の歌との違いはよく分かるだろう。与謝野晶子の模倣に優れていることが肯定的な評価とは結び付かないだろうが、啄木は「白羊会」の文学仲間の誰よりも与謝野晶子の「語彙、韻律、語法、句法」などを自分のものにしていたのである。それは啄木なりの言葉をあやつる能力や工夫があったから可能であったと思われる。この時期の啄木の歌より、後の天才詩人啄木の姿を見ることは難しいが、少なくとも盛岡中学の文学青年の中で、啄木は言葉を操る能力において上位にあったと言えよう。

ところが、「白羊会詠草」の浪漫的な歌が『岩手日報』の詩歌欄「文苑」の主流ではなかった。前述したが、『岩手日報』の「文苑」欄は旧派系の歌が主流であったからである。「白羊会詠草」は未熟で模倣的な習作の段階に止まってはいるものの、旧派系の歌が主流の「文苑」欄に当時の文壇の新しい潮流である浪漫的雰囲気吹き込んだ意義は評価すべきであろう。「白羊会詠草」は中央文壇とはかけ離れている東北の地方新聞『岩手日報』の読者、詳しくは「文苑」の読者に浪漫主義という時代の風潮（文壇思潮）を感じさせられる機会を与えたといえよう。

六、終りに

石川啄木が盛岡中学生だった時は日本文壇史上において浪漫主義が流行っていた時期である。『明星』を中心とした、とりわけ与謝野晶子の浪漫的な文学は盛岡中学の文学青年たちにも大きな影響を及ぼしていた。そういった文学青年の中に啄木はいたのであ

28)前掲注2)に同じ

29)前掲注28)に同じ

り、「白羊会詠草」が詠まれたのである。そして、これらの文学的熱情を支えていたのが『岩手日報』の詩歌欄「文苑」であった。

先行論で、「白羊会詠草」は未熟で模倣的な段階に止まっていることが指摘されている。それは的を得ているだろうが、一方啄木の歌が「白羊会詠草」の中でもっとも与謝野晶子の模倣に優れていることは興味深いことである。それは啄木なりの言葉をあやつる能力や工夫があったから可能であったと思われるからである。

「白羊会詠草」は旧派系の歌が主流の『岩手日報』「文苑」欄において当時の文壇の新しい潮流の浪漫主義的雰囲気吹き込んだのである。「白羊会詠草」は中央文壇とはかけ離れている『岩手日報』の読者、詳しくは「文苑」の読者に浪漫主義という時代の風潮（文壇思潮）を感じさせられる機会を与えたのである。この「白羊会詠草」は後の啄木の浪漫主義文学の始点であり、根幹であったといえよう。

【参考文献】

- 六岡康光(1995)「岩手日報と石川啄木」『館報 石川啄木記念館第九号』、p.25
今井泰子(1974)「啄木短歌の技法」『石川啄木論』、塙書房、pp.55-74
昆豊(1985)「その前史・模倣からの出発」『警世詩人 石川啄木』、新典社、pp.83-96
岩手日報社編(1966)『岩手人名大鑑』、岩手日報社
岩城之徳(1960)「解題」『石川啄木全集 第四巻』、筑摩書房、p.479
川並秀雄(1976)『石川啄木新研究』、冬樹社、p.301
岩城之徳編(1981)『石川啄木必携』、学灯社、p.56
岩城之徳(1987)『啄木全作品解題』、筑摩書房、p.30
日本新聞出版協会編(1956)『地方別日本新聞史』、日本新聞出版協会、p.22
岩城之徳(1955)『石川啄木伝』、東宝書房、p.65

要 旨

『岩手日報』は先行論で見ると「啄木の文才と人とおしむ」啄木の心の後援者であり、彼の文学的才能を発揮できる場でもあった。実際、活字になった啄木の全作品を調べてみたら、もっとも多く掲載された媒体が『岩手日報』である。つまり、啄木において『岩手日報』は「文学的支え」であったと言える。

『岩手日報』の「文苑」欄の内容は漢詩、俳句、短歌などおもに韻文となっている。その作品は読者からの投稿作品からなっている。その歌は旧派系が主なものであったが、「杜陵吟社」の歌のように新派系のものも歌われていたことが分かる。そこから当時の盛岡地域の詩歌の盛況ぶりが窺われる。特に、詩歌を楽しむ同人会（吟社）が流行っていたことが分かる。このような時代的雰囲気の中で、「白羊会詠草」は生れたのであろう。

「白羊会詠草」は今井泰子が言うように「『どれもこれも』が」「晶子に依拠」して「『三十一字音』」を並べていた模倣的習作の段階であったといえる。当時は『明星』調の浪漫的風潮とりわけ与謝野晶子の歌が多くの文学青年に影響を及ぼした時代で、啄木を含めた「白羊会」の同人たちもそういった文学青年の中にいたのである。

こういった流れの中で「翠江」こと啄木の歌も評価されてきたのである。確かに、啄木のこの時期の歌は語彙、韻律、語法、句法など與謝野晶子の模倣が多く見られる。たとえば、「夕の歌」の「夕くれを落葉に人の笛の手はわななく指にふし乱れけり」の初句の「を」、
「海棠に春の雨濃きおぼしまや染めむの歌の絹なき夕」の三句切れの切れ字の「や」、
「欄」「髪」「君」「紅」などの語彙がそれであろう。

ところで、興味深いのは「白羊会」の同人の中で啄木がもっとも與謝野晶子の模倣に優れているということである。與謝野晶子の模倣に優れていることが肯定的な評価とは結び付かないだろうが、啄木は「白羊会」の文学仲間の誰よりも與謝野晶子の「語彙、韻律、語法、句法」などを自分のものにしていたのである。それは啄木なりの言葉をあやつる能力や工夫があったから可能であったと思われる。この時期の啄木の歌より、後の天才詩人啄木の姿を見ることは難しいが、少なくとも盛岡中学の文学青年の中で、啄木は言葉を操る能力において上位にあったと言えよう。

ところが、「白羊会詠草」の浪漫的な歌が『岩手日報』の詩歌欄「文苑」の主流ではなかった。前述したが、『岩手日報』の「文苑」欄は旧派系の歌が主流であったからである。「白羊会詠草」は未熟で模倣的な習作の段階に止まってはいるものの、旧派系の歌が主流の「文苑」欄に当時の文壇の新しい潮流である浪漫的雰囲気吹き込んだ意義は評価すべきであろう。「白羊会詠草」は中央文壇とはかけ離れている東北の地方新聞『岩手日報』の読者、詳しくは「文苑」の読者に浪漫主義という時代の風潮（文壇思潮）を感じさせられる機会を与えたといえよう。この「白羊会詠草」は後の啄木の浪漫主義文学の始点であり、根幹であったといえよう。

キーワード：初期短歌、白羊会詠草、岩手日報、文苑、浪漫主義

투 고 : 2013. 5. 31
1차 심사 : 2013. 6. 15
2차 심사 : 2013. 7. 6